〈研究資料〉

合巻『雷神門再建御膳浅草法』の翻刻と図説

康　志賢

【書誌】

本稿は十返舎一九作・広重画の文政九年正月刊行合巻『雷神門再建御膳浅草法』の本文である、二丁裏から二十丁裏迄の翻字と解題である。基本的な書誌事項のみ確認しておく。

丁　数：前編、後編が十丁ずつ、二冊にて計二十丁。

表　紙：摺付表紙。「雷神門／前編／御膳浅草法／横山町二丁目岩戸屋喜三郎板／十返舎一九作／歌川広重画」。「再建／後編／御膳浅草法／横山町二丁目　岩戸屋喜三郎板／十返舎一九作／歌川広重画」「文政九丙戌　正月吉」。

底　本：国立国会図書館本（平沢威男本を適宜参照）。

【凡例】

一、翻刻に当たり、解読の便宜を顧慮して、句読点を付し、適宜漢字混じりに改めるが、特記すべき底本の仮名はルビに残した。

一、漢字・平仮名は通用字体に改め、促音・拗音は通用字体の大きさに改めた（「つ」→「っ」、「や」→「ゃ」など）。ただし清濁・ゐ・ゑは底本のままにした。

一、翻字文・引用文中の（　）の中と波線、及び台詞の前の（　）の中の話者表記は、筆者の補である。

一、判読不可の箇所は○○を以て示し、意味不明の箇所は斜体を以て示した。

［一図］（二ウ・三オ）

文政八年浅草寺雷門修復ありければ、観音様境内の神仏方を呼び集めて、ご相談のとき、観音様仰せられけるやうは、さて／＼この度の雷門の修復大分の物入り、思ひの外の痛事、講中へそう〳〵苦労も掛けられまいから、この方でこれからちと金の儲かることをして、なにかの入用を埋める算段をせねばならず。それにつき今は何でもとんだ珍しい新しい事でなければ、金儲けは出来ぬ世の中ゆゑ、今度わしの思ひ付きには、雷門の修復が出来たから、今までの雷風の神の木像を止めにして生きた雷風の神を天より呼び下し、給金で抱へて雷門へ置いたならば、これは珍しいと参詣があるに違いはないから、金儲けは請け合ひのすいくわ[1]と思ふが、どうであらうと宣へば、三社権現[2]、因果地蔵[3]、久米の平内[4]みな〳〵、これは奇妙、生きた雷風の神とは新しい思し召したちと感心すれば、観音様喜び給ひ、然らば天上へ申遣はすべしとて、塔の九輪[5]に輪を掛けて遊んでゐる鳶一羽呼び寄せ給ひ、このことを委細に仰せつけられ、そう〳〵天へ舞ひ上り、雷風の神を召し連れ帰るべしとのことなりけり。

1図

（地蔵）「にばな[6]をして雷門の船橋屋の菓子[7]でもおごればよい。あそこのは何でもうまい。」

（久米）「やがてまた開帳が始まると、美しい女の見飽き[8]をすることだから、わしは何よりそればかり楽しみだ。」

（三社）「貴様はたけもん（高い物）の油揚ば[9]かり掠ひつけてゐるから、ごま揚げ[10]でなければ食はれぬと言ふが、これから天へゆくなら、旅の用意にちと掠って持ってゆくがいゝ。」

（鳶）「わたくし天上へのお遣ひは畏まりましたが、とかく天気が良いとつい道で輪を掛けてをりますから、お飛脚には手間取りませうけれど、なるたけ急いで参りませう。」

＊浅草寺の観音様曰く、文政八年に雷門が修復したものの物入りが多かったのでその損失を補填するために、今までの木像ではなく生きた雷風の神を天から呼び寄せて抱えると金儲けになるだろう、という仰せに浅草寺に祭られている神々も賛成し鳶を使者として送り込む。

絵柄：観音様を中央に因果地蔵や久米平内（石像）、三社権現（腰簑をまとった漁夫の服装）が輪になって座り、鳶が畏まっている

絵柄。舞台が天上ではないので雲は描かれず。

［二図］（三ウ・四オ）

浅草の観音様より鳶をおつかひにて天道様のかたへ委細を申つかはされければ、天道様より雷と風の神へそのことを仰せ渡されけるを、雨仲間の者ども聞きて申しけるは、伊勢の国には雨の宮風の宮といふあり。然れば、浅草の雷門にも雷を止めて風の雨の神を置くべきはづなり。ことに天が太平如く成就のためにも、五風十雨[11]とて雨と風とは付き物なれば、このこと天道様へ申し上げ、我ら仲間と風の神浅草へ行くべしといふに、いづれも聞きて、これは尤もといふ時、春雨（はるさめ）いふやう、しかしかの方にても既に雷門と唱へて昔より雷と風の神を据へお

2図

くなれば、今更さやうにはなりがたしと、いふべきなれば、このこと如何あらんといふ時、時雨（しぐれ）と夕立（ゆふだち）は気の短き者どもなれば、春雨の言葉なまぬるし。とかく此事言ひ出してみざれば知れぬこと。もしも適はぬ時は、われ〳〵言ひ合はせて、雷門の出来上がりし日より、毎日毎日雨を降らし、参詣の者の邪魔を見知らせくれん、と勢ひ込んでぞ申しける。

（梅雨）「かう並んだ所は雨はかりだが、この中に濡れのきゝそうな男は一人もない。まだもしぐれ[12]だのむらさめ[13]だのといふ名が、どうか一番色気がありそうだ。」

夕「それても女に裾を捲らせて白い肌を見るは、夕立ばかりだが、これもあっちが逃げるのだから何にもならねへ。」

（五月雨？）「下界へ行ったら、此本（ほん）の板元で売る運利香（うんりかう）といふ薬を買って運を強くして無尽でも一の富[14]でも取るがいい。願ひ事望み事奇妙に適ふといふ薬だ。そして稲荷新道の坂本氏で売る顔の薬の仙女香[15]も奇妙だ。かゝあの土産に買ってきてやらっし。」：

広告

春（はる）「貴様たちは肝腎の相談はせずに、女のことばかり言ってゐるから、ものが決まらぬ。まづわしのいふことを、とっくりときかっしゃい。春雨といっちゃアしほらしい[16]名だから、女に好かれるは俺ばかりだ。」

＊浅草観音の要請で天道様が雷と風の神を遣わすことにしたことを聞いた雨連中は、雨と風は付き物であるので、雷の代りに自分たちが浅草寺へ行くべきであることを、天道様へ訴えようでは

ないかと相談する場面。名前を記した円形を頭に頂いている時雨・梅雨・春雨・五月雨・夕立が火鉢を囲んで車座になっている絵柄。長屋に住む鳶職人か市井の旦那衆の如く擬人化されて登場。そのような服装をした五人衆。

［三図］（四ウ・五オ）

雷のうちにて今度浅草へゆくべき籤に当たりし雷は、去年稲妻といふ美しき女房を持ち、子まで設けて夫婦仲良く、至って女房に孝行もの[17]なれば、今度下界へゆくことを女房が嫌がるゆへ、夫雷困り果て女房を置いてゆくことは嫌なり、如何はせんと思ふ所へ、雨仲間のうち夕立は雷とは至って心安きゆへ、かの雷のかたへ来たり。下界へゆく事を女房が嫌が

3図

ると聞き、これ幸ひと雷へ申しけるは、貴様は臆病者ゆへついと下界へ落ちたることなければ、その様子は知るまじ。下界の人間の美しきこと、わけて江戸は男ぶりよき所にて、たとへにも乙な[18]男といひ、殊に浅草は吉原への往還にて、きん〳〵とした通人[19]男の行き来する所なれば、なか〳〵女房持ちたる者の住むべき所にあらず。貴様女房を連れて下界へ行くことを止めにして、その代りに我らを遣ってくれまいか。雷の代りだと我ら故事付けて風の神と雨の神にするつもり。この相談は良かろうと雷か鼻の下の長きを見込みて、いろ〳〵と勧め掛かれば、雷暫く思案して、如何様これは我らが持病の疝気が起こりしと仮病をつかひ、この株は貴様へ譲らふ、とのことなりける。

（夕立）「きのふも貴様のごろつく音がしたから、これはおいらも出かけずはなるまいと、支度をして出てみたら、貴様が生酔ひになってごろつくのであった。いま〳〵しい。」

（雷）「イヤのう、この頃はごろつく元気もない。とうから[20]太鼓が破れてゐる。まだ張り替へねへから、ごろ〳〵とはいはないてひしゃ〳〵[21]だから威勢がない。」

（女房）「お父さんのやうにどろ〳〵[22]と叩いてみや。」

（子供）「どよ〳〵〳〵〳〵。」

＊女房子供を置いて下界へ行きたがらない雷と親しい夕立は、通人達が往来する浅草は女房持ちが住むべき場所ではないと言うので、仮病の疝気を口実にして譲ってもらうことにする。舞台は柱に三巴模様の連鼓（雷鼓）が掛かっている雷の自宅。困った顔

の雷（両角。雷紋の羽織を着用）に、何か喋る体でお猪口を持った夕立（職人風の服装）。桴（ばち）を持った女房と遊ぶ子供（角有り）。『黄表紙総覧』の「浅草観音の要請で天道様は雷神と風神を遣わすことにしたが、雷神の先を越して雨どもが下降し」という概要は誤記か。

［四図］（五ウ）

かの雷は疝気が起こりて下界へゆくことを断りしと聞きて仲間の雷ども言ふやう、さても貴様は今度下界へゆく金儲けを嫌がるといふは、どうしたものだ。馬鹿な男だ、といへば、かの雷聞きて、女房を人間どもが寝取られやうかと思ふが嫌さに、とも言はれず、いや〳〵わしは下界へ行く金儲けよりは、他に大きな金儲けの思ひ付きがあるから

4図・5図

だといふ。それは何だと聞けば、此頃下界では神事舞（じんじまひ）といふが流行ると聞いたから、それをこの間から稽古した。追っつけ天（あま）の河原へ小屋を掛けて始めるつもりだと言ふゆへ、みな〳〵それは珍しからう、こゝで一つ所望と望みかけられ、さらば一番やってみせやうかと、持ち前の太鼓を叩かせ雷袴をはきて、塗り盆二枚を両手に据へて神事舞をぞ始めける。

（舞う雷）「はりとう〳〵、何ときついか〳〵」[23]

（太鼓叩く雷）「五条（でう）の橋にて、千人切りなさばやと、存じあげ候。どこすこ〳〵〳〵。」[24]

（三番叟姿の演奏者）「これは〳〵とうはち五もんではないが、なるほどきめう〳〵。」[25]

＊下界へ行く金儲けをなぜ断ったのかと仲間の雷達に詰問された雷は、下界で流行る神事舞をここでやって大金を儲けるためだと言ってその舞を披露する。塗り盆を両手に持ってお能の演者のように袴姿（上は雲紋、下は雷紋）で舞う雷は、お能の鬼面がちょうど似合う顔にて描かれる。演奏する雷二人の座像。一人は太鼓を叩き一人は鉦（小鼓？）を鳴らす。

［五図］（六オ）

雨の仲間にては雷をたらし込み、雷の代りに雨の方から何でもかでも、雨仲間から行かねばならぬと言ひ出せば、また雷仲間にてこれは昔より此ほう仲間の持ち前なれば、もしも下界へ行くことを嫌がる者ありとも、他に雷のなきやうに雨仲間の者を遣る言

はれなし。是非ともこのほうより、下界へゆかんとて雨と雷との争ひ果てしつかず、のちには大喧嘩となり、打ち合ひ掴み合ひて大騒ぎとぞなりける。

（雷仲間）「ふさ〳〵しい野郎[26]めだ。こいつめが〳〵ごろ〳〵〳〵ひしゃ〳〵〳〵。」

（喧嘩中の雨）「同じ雨でも俺は槍のやうな雨だぞ。降って〳〵降りこくってやらう。[27]」

（逃げる雨）「俺は夕立の雨だから足が速い。逃げることはゑてて[28]ゐるから、許せ〳〵、くはばら〳〵。」

＊嫌がる雷の代りに自分が下界へ行くという雷仲間ととっくみあいの喧嘩をする雨仲間という場面。逃げる体の雨仲間も描かれる。雷は両角・逆髪（蓬髪）[29]、半裸で獣皮（虎の皮）を腰にまとい、三巴模様の連鼓を背負い、ばちを手に握る。雨連中は「雨」と書かれた円を頭に頂いて、市井の職人の姿。喧嘩中の雨は諸肌抜いて、喧嘩鉢巻。

［六図］（六ウ・七オ）

雨と雷との喧嘩のいんけん[30]天道様聞こし召して驚かせ給ひ、それは雨仲間の者ども不埒なり。このほうより雷と風の神へ申し付けおきたるところ、雨ども我儘に雷を押し退け代りに下界へ行かんとは不届き至極なり。雷風の神と定まりあることなれば、雨を遣はすことなりがたし、と仰せいだされ、雨仲間大きにへこみ、みな〳〵うちより相談し、天道様の仰せなれば詮方なし。さりながら此まゝにへこんでしまふも残念なり。如何はせんと言ふとき、一座口を揃へて他に手段なし。この意趣晴らしには毎日〳〵雨を降らし雷門の修復を妨げ、参詣の者の難儀するやうにせば、浅草の観音より我々仲間へ渡りを付けてくる必定なり。

6図

その時こっちの腹の居るやう[31]に手段あるべしとて、みな〳〵それにいつけ〇〇し（意を決し？）[32]、それより雨仲間総出（そうで）にして、毎日雨を降らしける。

この程の天気定まらず、空のもめるは天上にいさくさあるゆへと、浅草の観音様このことを聞き給ひ、これは我らの誤りなり。昔より定まりありしことを、新奇の思ひ付きせしゆへ、このいさくさも起こりたり。然らば古来の通りにして生きた雷風の神は止めにせんとて、次へ

（雨1）「何でも張りの強い花魁を見るやうに、これから降って

（振って）ふり続けにしてやれ。〳〵」

（雨2）「総体（＝大体）雷めらが、近年ろくそっほうな[33]鳴りやうもしないくせに、威張りをるが気に食はぬ。」

（雨3）「五穀を潤すはおいらが役目だ。雷めらは何の役に立つ。畢竟太鼓があればこそ、雷太鼓がなくてみろ。地獄の鬼とぜん（同然？）だい。雨風と言って風の神に雨の神は付き物だものを、雷どもはどいつもこいつも分らぬやつらだ。」

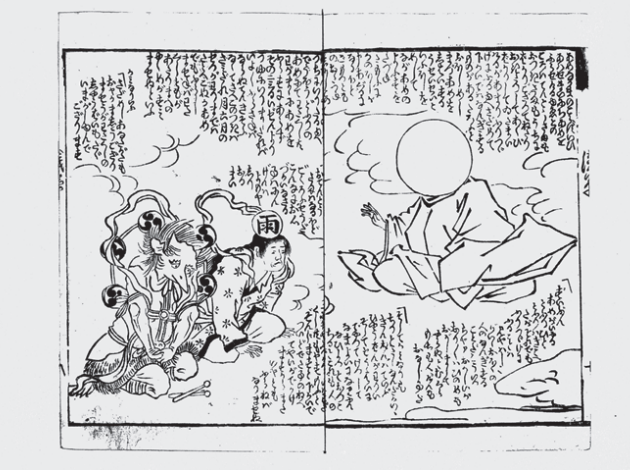
＊喧嘩騒動を聞いた天道様が更に雨ではなく雷風の神を派遣することにしたという知らせを聞いてへこんだ雨達は、意趣晴らしに総出にて毎日雨を降らし、浅草の観音を困らせる。

絵柄：車座になっている雨五人衆は、前の三ウ・四オの五人衆よりもクローズアップされ迫力ある筆致（悪巧みをする表情が強調されるかのような効果あり）にて描かれる。この場面で雨の名前は区別されない。前では雨の種類による駄洒落を混ぜた会話がされていたからであるが、ここでは雨の種類とは関係ない会話をするので区別する必要ないからであろう。前と同じ紋様の着物を着用しているのは「梅雨」として登場していた雨のみ。

雨1の台詞は地口、雨3の台詞は雷の形相が鬼そっくりであるゆえに、真実を言い当てる悪口。

［七図］（七ウ・八オ）

雨仲間残らず言ひ合はせ毎日雨を降らせけるゆゑ、この頃は天道様もお月様もうちにばかりござって寝たり起きたりして欠伸ばかりしてゐ給いけるが、あまり降り続けに降るゆへ、定めて下界では難儀するものがあるたろふと思し召し、まづ雨を支配する雨晴星[ママ]といふ星を召して長雨の様子を尋ね給ふに、かの星が申しあぐるに、なるほどごもっとものお尋ね、しかしこの間の天気は、八専[34]にてその上、土にいりたるゆへ、定法通りの雨にて、わたくし共我儘に雨を降らすにあらず。その二三日以前より梅雨に入りましたれば、いよ〳〵降らさねばならぬ天気。そふなくてさへこの月は五月雨月、六月の節変わりまでは、たとへ小糠雨[35]でも降らしませねば、わたくしどもが当たり前の役目が済みませぬといふ。



7図

雷言ふ「定めしあなた方も、おやかましうござりませうが、わたくしの商売も只今が旬でござります。」

（天道様）「随分雨がいやる通り一通りは聞こへ

たが、それでも降り続けに降ることは見合はしたがいい。多くの人の難儀することだ。こういっちゃア可笑しいが、おり〳〵は日の目（日差し）も拝しましてやらぬと、むぐらもち（＝もぐら）も人間も同じ事だ。」

（天道様）「そして雷もちっと嗜んだかいい。近年は大分評判が悪い。そして商売にでやって決して生酔いになりやんな。ひょっとおっこちると、これも人の難儀することだ。」

（雨）「一日や二日くらいは、わたくし共も休もふと存じますと、下界でついど（＝未だかつて）出た事のねへ手合が出かけますから、また嫌とも降らねばなりませぬ。」

＊長雨のことを天道様に聞かれたうせいせい（雨晴星）は、梅雨の時期だから仕方がないと答える。

絵柄：雨を支配する星がこの丁で初めて登場して、長雨を詰問する天道様に対して、長雨の立場になって弁解するのがこの丁の本文内容であるにもかかわらず、図像には「星」ではなく「雨」と、蓬髪に雷鼓担ぎ、前に桴をおき、烏天狗のような鼻（嘴？）の「雷」（今までの雷とも形相が異なる）が天道様の前に殊勝な面持ちで畏まっているのである。

この場面から寛政十年刊一九作画の『雨宮風宮出盡略縁起』を借用するが詳細は別稿を期する。

［八図］（八ウ）

雨はお天道様に嫌みを言われて手下の雨共へも言いふらし、やふ〳〵とその日は日暮れ頃より雨を休ませけるゆへ、久しぶりにてお月様ぶら〳〵と出かけて見給いけるが、長降りのあげくにて、まだ黒い雲がどころ〳〵に散らかっているゆへ、道が悪く草履では歩かれず、どふやら雨は上がりたれど、なか〳〵笠は放されずとお月様笠を召していでたもふ。月が笠（暈）を召してござる時は、ゑて（＝よく）雨が降るといふ因縁はこのゆへなり。

8図・9図

（作者）「この時せっちうあん[36]の発句に、五月雨や　あるよ密かに　まつのつき、といゝしは、よく人の知るところ也。こんな知れたことより何も書くことなし。」

（雲の中の笠をかぶった月）「どふかこうしたところは、酒の通いとっくりを持ちそふな風体だ[37]。」

＊お天道様に言われ雨は久しぶりに上がれども、まだ道が悪いのでお月様は笠を被って出かける。

絵柄：下は屋根と火の見櫓が密集し、雲の中には笠を被ったお月様が出ている。

［九図］（九オ）

それより雨は次第に強くなり、毎日降り続けなれば、天道様は世界の難儀を思し召して、いろ〳〵仰せつけられけれども、かよふに降りかゝりては、天地の間にこれはといふよふな変なことがなければ雨はやまされぬ、などと我が儘をいふゆへ、天道様密かに風の神かたへ、お遣いをたてられ雨を吹きはろふよふにと、仰せ付けられける。

お星様お使者に来たりたもふ。「忠臣蔵の文句に、たとへば星の昼みへず、夜は乱れてあらわるゝ[38]といふが、この節はいっかう夜も昼もむちゃになって殊の外退屈いたした。」

（風の神）「委細ご覧の通り畏まりました。」

＊またもや降り続く雨を吹き払うようにと、お星様が天道様の使者として風の神へ申し付ける。

絵柄：寛政十年刊一九画作黄表紙『雨宮風宮出儘略縁起』と、文政九年刊の合巻『雷神門再建御膳浅草法』の本場面における風の神は、牙と両角の生えた顔に「風」と書かれた団扇。風袋を背負う。本場面にのみ描かれたお星様は、寛政八年刊の黄表紙『雷門再興御膳浅草法』の一オ・二ウに描かれていた星と類似。風の神も類似。

［十図］（九ウ・十オ）

風の神は天道様の仰せを受け、女護の島[39]の荷物ほど、おびたゞしく風を袋に仕込んで、そろ〳〵と口を緩めて風をいだしけるに、思いもよらず雨はこの風に吹き払われて、忽ち雨止みければ、天道様俄にお支度なされて出かけ給い、猶も指図をし給いて、まだ所々にまごついている雨雲まで残らず風に吹き払わせければ、上々吉の天気となりて、久しぶりに天道様世界中を照らし給いて諸人の喜ぶを嬉しがりたもふぞ有り難き。

（作者？）「風の神雨を残らず吹きはろふ。今に風が吹いて雨の止むのは、みなこのよふなことなるべし。」

（天道様）「手柄〳〵。これで世界が広々としたやふだ。」

10図

（風の神？）「そりゃふくやれふく、只今おふきじゃ、てんつく〳〵これつくてん[40]」

（風の神）「天地乾坤今度の風は吹いてびっくりさする、さんざん降った長雨すい〳〵のすい。」

問て曰「雨は糸のやふに細く降るものだが、なぜこの雨は丸いの。」

答曰「この丸いは雨の寄り[41]といふものさ。出来物によりのできるよふなものにて、雨も長く降るとよりが出来て、このよりが散ってしまはねば、天気になりやせぬ。」：屁理屈の問答

＊天道様の指図で風の神によって雨雲はきれいに吹き飛ばされて天気になる。

絵柄：舞台は雲の上。風船のように風袋の口元から風を吹出してシャボン玉（水玉）のような雨たちを吹き払う風の神（仏教の天人が身に着けるような細長いショールを身にまとっている）。扇子で指図をしているか、風を巻き起こしている体の○顔の天道様。

［十一図］（十ウ）

さても雨は風のために出し抜けに吹き払われ、手下の雨共大きに熱くなり、何でも今度雨の降る時は言い合わせておもいれ長く降りもし、又風が吹き払いに出たら何でも一番けちを付けて、このゝち肩で風を切らぬ[42]よふ見せつけてくれんと相談する。

（雨1）「我儘に降り出してはまた天道様から尻がこよふから、もし夕立の触れでもあったら、その時こそは喧嘩買をふだ。」

11図

（雨2）「久しぶりの日和だから、まづ当分はおいらをば休ませて置くだろふ。どふぞ早く降りてへもんだ。」

（雨3）「今度は言い合わして風を受け付けぬがいゝ。てんでに振り出し[43]でも飲んで出かけたがいゝぜ。」

＊吹き払われた雨たちは仕返しを相談する。

絵柄：頭に「雨」と書いた円を頂いている雨三人衆が車座になっている。

文政九年刊の合巻『雷神門再建御膳浅草法』国会本には「文政九年丙戌新板目録」の広告あり。国文研平沢本には「富貴自在　運利香」の広告文あり。

［十二図］（十一オ）

雲手合いも雨と共に風に吹き払われ、大きに急き込み、むっか〳〵とむかばらを立てゝ怒る。雷が側から太鼓を叩いて急き込ませるゆへ、いよ〳〵雲は腹を立てゝ、今にも振り出しそふな勢いになる。同じよふに、相手を悪く言って人を焚き付けなどするを、太鼓を叩くといふは、この雷よりいでたる事なり。またむく〳〵と立ち雲のおこるは、この言われにて、とかく雲は気の短いものとみへたり。下界から見ると、とかく立ち雲のみへる時は、どこともなしに雷のごろつくは、やれ降れそりゃ降れと、側で太鼓を叩いて急き込ませるとみへたり。

12図

（作者）「雲は毎日怒って（起こって）みても天道様からお指図でもなければ、夕立のもよふしもなく、いよ〳〵急き込んでばかりいる。」

（雷）「こふいふ晴れきった天気では、まだも頼みは貴様たちのむかつくを頼みに、おいらも太鼓を叩いてほんの虫養いをするといふもんだ。」

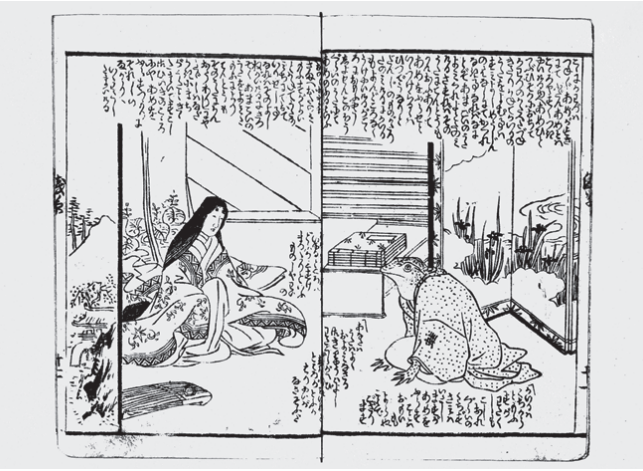
＊雨と共に吹き飛ばされた雲は、雷が太鼓を叩いてけしかけるので腹を立てて降り出しそうになる。

絵柄：腹を立てる雲は頭の代りに雲が立ち上っているので、火山が爆発するようで怒るイメージに相応しい。その側で太鼓を叩く雷。

本場面では雷と雨と雲が仲間のように受け取られる。

［十三図］（十一ウ・十二オ）

こゝに蛙は、つねづね雨が好きにて普段雨とは心安く付き合いけるゆへ、雨一粒密かに落ちて、かわづのかたへ訪ね来たり（童話的な表現）。予てかいるの歌を詠むことは住吉明神の話にて隠れなき事なれば、何とぞ雨乞いの歌詠みくれよと頼みける。さすればその歌に天道も感応ありて、雨を降らせと言付けらるゝは必定なりと、段々の物語頼みけるに、かいるも拠ん所なく請け合いけるが、心に思ふやう所詮このほうぐらいの歌にて雨の降るといふ事も覚束無し。これは小野小町様へお頼み申すがよいと、予て歌の道にておていりせし事なれば、そのよし願いけるに、早速雨乞いの歌を詠みたもふにより、天道もその歌に感応ありしにや、



13図

但しは名高き小町が歌と聞き給いて少し御贔屓の心にや、雨を降らすつもりにそれ〳〵の雨かゝりへ言い渡し給いける。

（蛙）「かいるは口からともふすが、わたくしも腰折れぐらいの口ずさみは致しますが、雨を降らすことは思いもよらぬことでござります。」

（蛙）「あなたは歌はよくお詠みなさる御器量はよし。わたくしが蛇だと魅入れますに、しかし魅入れたところが、とふか張り合いがなさそふだ。」

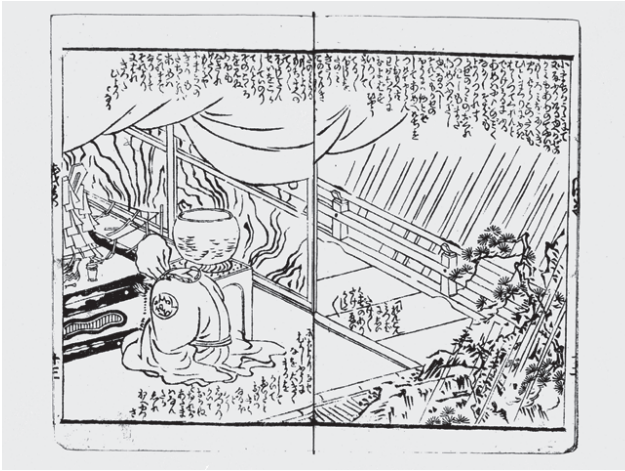
（小町）「そなたかそふしていやるところは、どふか三すけ待ったりといふものしゃわいの。」

＊蛙は親しい雨から雨乞いの歌を頼まれ請け合ったあと、小野小町に頼んで詠んでもらったら、感応してか天道は雨を降らすことにする。

絵柄：十二単を着た小野小町の前に畏まっている蛙。

［十四図］（十二ウ・十三オ）

小町か歌にて又雨降りけるゆへ、風の神も雨の手合いの目論見を憎きやつばら（＝やつら）この度も、ひと捲りに吹き払ってくれんと出かけみるに、降る雨は槍の如くなか〳〵側へも寄り付かれす、風の神の遅れ付きしも（＝気後れするも）、まだ雨は降り出しゆへなるへし。それても風のほうには何とぞして雨へけちを付けてやらんと思へども、我が力に及ばず、いろ〳〵評議して、照照法師を頼み来たり。この天気よくなるよふに祈祷を頼みける。元より持ち前の照照法師、丹誠を凝ら



14図

して祈り、天道その心を見ぬ顔もなされ難く、最早小町への義理も立ちたれば、雨はこれまでなりとて、それより又晴れ切った日和となる。

（照照法師）「蓮根三つ葉に椎茸〳〵、葛のありたけゑいからし〳〵」

（照照法師）「おいらが衣にばかり、なせ昔風に名を大きく丸をして書いておいたと思ったら、なるほどかうしっかり書いておかぬと、俺が頭は何たか知れねへやつさ。」[56]

＊槍のように降る雨を吹き飛ばすことができない風の神は、照る照る坊主に祈祷を頼み、そのお陰で天気は晴れる。

絵柄：外は雨が降り注ぐ中、念珠を手にして頭に布を被った体の照る照る坊主が丹誠を込めて神殿で祈っている後ろ姿。

［十五図］（十三ウ・十四オ）

照照法師が祈祷によりて、また上々の天気続き、雨は上がったり屋[57]となりければ、また〳〵雨のほうで寄り合い、もふ小町でもいくめへ、とふしたもんだろふと相談のうち、闇雲思い付きにて照照法師が行法を挫く算段がよし。なぜといふに小町が歌の功徳にて、まだ降る雨の止みたるは、照照法師（↑鳴神上人）が世界の竜神を封じ込めたるゆへなり。その行法をさへ挫きなば、竜神いでて猶降らす事疑いなしと、闇雲の仲間の雲手合いに、それ〳〵の役を付け、器量優れし天人を頼んで、雲の絶へ間と故事付け、白雲黒雲の二人を照照法師の弟子となし、はくうんこくうんと名乗らして付け置き、雲の絶へ間が色仕掛けの取り持ちして、照照法師がぎゃうぼうを茶々無茶にするつもり。詳しくは鳴神上人の狂言[60]の如くなれば、筋書きをこゝに端折る。

15図

（白雲）「てんと（＝この上なく）美しいてんわうじゃ（歌舞伎役者の屋号である天王寺屋を指すか）の濫行ときたは。」（雲の絶間姫？黒雲？）「かゝる山がにやさ坊主、さてしゅけう（酒興？）じゃに　やさ女とはさしづめ愚僧が富士太郎[61]といふものだ。」

＊雨の仲間である闇雲は照照法師の行法を破って竜神を出すために、美女の天人を雲の絶え間役に、しらくも・くろくもを白雲坊・黒雲坊の役にして派遣する。

絵柄：狂言に準じた舞台。滝壺を背景に中央は鉦を手にして念

仏を唱える体の雲の絶え間姫。その両側には酒樽を持つ黒雲坊、白雲坊。

［十六図］（十四ウ・十五オ）

さすがの照照法師も雲の絶へ間が器量にうつつを抜かして、ついにぎゃうぼうをはぐらかされ、何にもならぬものとなり、封じ込めたる竜神一度に起こり立ちて雨、元の如くなりければ、風の神手合い悔しがり、また〳〵寄り合いを付けて相談しけるに、この上はどふも仕方があるまい。どふしたら良かろふと、やふ〳〵に思い付き、この上は地震をやってもらうがいゝ。九は病、五七の雨に、四つ日照りといふ[62]から、何でも四つ時分に地震がすると日和になるから、地震の本店、かの鯰を頼むがいゝと相談極まる。

16図

（風1）「何ぞといふと涙雨を降らして[63]、吠へづら（＝泣き面）をしやアがるくせに、降る（振る）の降らん（振らん）のと気のつゑゝやつらだ。」

（風2）「その代り冬になると、毎日からっかぜ[64]ばかり吹かしてお湿りが欲しいといふくらいな目にあはそう。」

（風3）「鯰を頼みに行なら、瓢箪酒でも持ってゆくがいゝ。ぬらくらと抜けさせぬよふに[65]。」

（風4）「五風十雨[66]といふから、別に何もへこんでいる（＝減る・損をする）出入り（＝勘定・増感）はねへ。」

＊元の如く降る雨に、風の神たちは四つ時分に地震を起こすように鯰に頼もうと相談極まる。

絵柄：外は雨。車座になって会合中の風の神五人衆の中で、二人は一角、三人は両角。特に髭が多くはえている風の神は毛抜きを持っており、髭を気にしている様子。絵柄が寛政八年刊行の黄表紙『雷門再興御膳浅草法』六オの悪風神三人衆寄り合いの絵柄と類似。話柄は関係ない。

［十七図］（十五ウ）

風仲間には鯰を頼んで、四つ時に地震を少しやらかしてもろふつもりにて、いろ〳〵の進物を持参しわざ〳〵鯰のかたへ訪ね来たり。何とぞ日和になるやふに少しばかりゆさ〳〵とお頼み申たし。それもあまりひどくては、又人の肝をつぶすも気の毒、ほんの日和になるといふ、まじないばかりのみの、くった所をちょっとおさすりなさるぐらい、もふそれも長くおかきなさると堪りま

17図・18図

せぬ。どふぞ宜しくお頼み申しますといふ。

（鯰）「随分承知の助さ。ちょっと灰を覆ふぐらいの事でも、世界中が少しづつはゆさつき（＝揺れ動き）ます。まだおらが嚊衆を持たぬので、世界の大しやわせさ。ひょっと女房ができるが最後。毎晩世界が動くのさ。」

（作者）「加古川本蔵といふ身にて賄しながら、無性に軽薄を言って頼む。」

＊人間が吃驚しないように少しだけ地震を起こして欲しいと、鯰に進物を持ってきて頼む風の神。

絵柄：ひれ伏して鯰に金の賄賂を送る風の神（↑加古川本蔵）の後ろ姿。鯰（↑師直）は斜に構えて頭に宝珠のようなのを乗せ、肩には「地」の記しあり。[67]

鯰の台詞は卑猥、作者の書入は『仮名手本忠臣蔵』のパロディ。

［十八図］（十六オ）

九は病、五七の雨に、四つ日照りといふ地震の歌は違いなく、翌る日の四時に地震が少しゆさつくと思ふと、忽ち雨か降られぬよふに天道様から仰せ付けられ、日和となりければ、今まで太鼓を叩いて有頂天になっていた雷も、俄にからりっとした天気になれば、拍子抜けがしてこそ〳〵と支度して立ち帰るみち〳〵雨と話しやい、何でも今日の地震も風仲間の目論見に違いなし。この意趣返しも仕方がありそふなもんだと、話しなから立ち帰る。

（雨）「空っぽの徳利じゃアねへが、また振って（降って）みずはなるめへ。」

（雷?）「何だこの頃の日和は降ったり照ったりして、居続けの手合いが気が定まらぬから、花魁達の心遣いが、おいらはとんだ気の毒だ。」

＊四時に起きた地震で日和になったので、雷も雨と共に帰りながら意趣返しを考える。

絵柄：帰路につく雷（着物には三巴紋様が鏤められる）と雨。葭簀張りの茶屋あり。寛政八年刊行の黄表紙『雷門再興御膳浅草法』二ウ・三オと類似。雷はつい雲を踏み外して他の所へ落ちてしまったので、雲を伝って下界の浅草へと風の神と二人連れで下るという場面と構図類似。

［十九図］（十六ウ・十七オ）

又お天道様から理詰めで雨を降らすよふにとお指図のあるやふに、いろ〳〵と智恵を奮って、雷が太鼓からの思い付きにて、雨仲間寄りやい勧進相撲晴天十日[68]のうち天の河原において興行のつもりにて、太鼓を回しける[69]。下界の相撲は降る事も、照る事もあれと、天竺[70]の相撲といふと、いつでもふるが、古例なれば[71]天道様も昔よりの例は外されずと、それよりまた雨を降らすよふにと仰せ付けられければ、雨仲間は大きに喜び羽目を外して降り続ける。

19図

（留め袖の女性）「また降るそふだ。染め物の遅くなるには困り果てる。じれってへ日和たのふ。」

（雨1）「俯いてみや。鳶が輪を掛けていやアが[72]る。なるほどいま〳〵しい天気だ。」

（雨2）「どふぞ降り続くよふにしたいもんだ。相撲は取っても取らいでもだ。」

（雨3）「思いなし（＝気のせい）か。太鼓の音もどてふる〳〵と聞こへる。まづはい、吉相だ。」

お天道様の御家来烏お遣いに出る[73]「困ったもんだ。またおらがお旦那がうちにばかりござるだろふ。旦那がうちだと忙しくてならぬ。」

＊天竺の相撲の時は雨を降らすのが慣例ということで、雨たちは触れ太鼓を回して勧進相撲興行を知らせる。

絵柄：棒に引っかけた大太鼓を叩きながら市中に触れ回る雨たちと、それを見物する体の仲間姿の烏と留め袖の女性。

［二十図］（十七ウ・十八オ）

相撲の太鼓が回ると又降り出しければ、風仲間でも知恵袋の底をはたいてやふ〳〵と案じいだし、昔より御講日和とて[75]、門徒宗[76]の御講が始まると日和が続く古例なれば、御講を先へ取り越して（＝繰り上げて）勤めんと、寺寺を頼みて御講を始め、風仲間の多衆（＝大勢）も残らず肩衣を引っ掛けてありがたや〳〵と出掛けければ、何でも天に偽り無し。古例とあれば外されずと、また〳〵雨をとどめ、日和かん〳〵としてくる。十夜月夜[78]に御講日和とて、昔より今に変はることなし。

（作者）「参詣のひとびと、あめあいた〳〵[79]と言って参る。」

20図

（風の隠居1）「どれもここへ来た（北）風だそふな。」

（風の隠居2、女性を見ながら）「あの年増をお俎板直し[80]とやらかして、一口味わいたいの。」

（風の隠居2）「なぜか女はみな後家になると、とんだ美しくなるもんだ。おいらが嬶[かかあ]も早く後家にしたいもんだ。」

（風の小僧）「帰りには韋駄天[81]の曲馬でもみてへもんだ。」

（風の老婆）「おひただしい参詣じゃ。どふぞこれでお日和が続けばよい。」

＊御講日和という慣例を思い付いた風は、寺に頼んで御講を始めたので日和になり、風仲間が境内に群集する。

絵柄：お寺に集まった「風」の標を頭に頂く群衆六人。お年寄り三人を描き入れたのは、お経を読む仏教行事に集まる群衆の中にはお年寄りが多いことを表す。小僧を連れた隠居か医者風の老人。腰が曲がったお婆さん。いちゃついている体の男女。年増風の女性は前帯に念珠を手にしているので後家を表す。

［二十一図］（十八ウ・十九オ）

雨仲間は又御講日和でけちを付けられ大きに急き込み、最早この草紙の紙数[かみかず]も一枚か二枚となりたれば、てきはき[ママ]とかたを付けてしまわねばならず、百万遍[82]ならば最早なアだ〳〵といふ時分、旬もへチマも要らず、天道様のお叱りを受けるも覚悟のまへ無二[むに]無三[むざん]（＝ひたすら）に降り出して、御講日和を台無しにしてくれんと、雨仲間言いやわして一度にばら〳〵と降り掛かりければ、風のほうでは肝を潰し、憎き雨が仕方也。あれ残らずひとまくりに吹き払へと勢いければ、雨のかたにも一寸[いっすん]も後へは引かず、降ったり吹いたり命限

21図

りと挑みやい、のちには互いに掴み合い、ぶつつぶたれつ大喧嘩となりける。

（雨の胸ぐらを掴んでいる風）「うぬらが降り込んで来たとって馬の耳に風[83]でもねへ。」

（逃げる雨1）「雨のあしもと（足下）乱るゝ、肩を並べあなたへばらり、こなたへばらり、ばらり〳〵ばら〳〵ばっと逃げてしまおふ。」

（逃げる雨2）「あいつらと掴みやったら、どふかじは〳〵と寒くなってきたよふだ。[84]」

（棒を持って立ち向かう雨）「雨よ風な、雨風な、じゆじや、じゆや〳〵　じゆんづらべいのべい。[85]」

（飛び掛かろうとする雨）「初手に負けたは、ほんの雨（飴）をねぶらしたのだ。[86]」

（倒された風）「くはばら〳〵堪忍（かんにん）じゃ〳〵。」

＊この草紙も最後に近づいたからと、一度にばらばらと降りかかる雨に、風も負けずと降ったり吹いたりの大荒れ模様、掴み合いの大喧嘩になる。

絵柄：風三人、雨五人、総勢八人の大喧嘩。

［二十二図］（十九ウ・二十オ）

思いもよらぬ雨風の激しきに天道様大きに驚き給い、八十八夜[87]は過ぎてしまう二百十日[88]にはまだ早やし、この吹きぶりはどふしたもんだと立ちいでゝ見給へば、雨風の闘いにて大騒ぎ也。

22図

天道様やふ〳〵と両方を押止め給い、わたくしの遺恨にてこのほうからの指図も待たず、夥しき雨、風は吹き払わんとする、吹き立てられじとするはづみにて、そのほう共いざこざは世界の人の難儀となる事なり。双方共にそのまゝには差し置きがたく思へども、まづこの度は差し許す也。こののちきっと慎むべしと御叱りあり。その上両方へいろ〳〵と御教訓あり。仲直りを取り結び給ふ。これよりして五風十雨その時をたが（ママ）へず、一切の草木、雨によって育ち栄へ、風によって花咲き実るも、天地自然の定法（せうほう）にして、まことに揺るがぬ国の勲功（いさほし）めでたかりける次第也。

（天道）「雨と風の神は、どれが兄やら弟やらいつも離れぬ中じゃもの。これから仲良くしたがよい。」

（作者）「天道様仲直りの盃を取り持ちたもふ。」

（天道）「二人長くこれを飲んで一つ打ってくだせへ。めでたい〳〵。」
（雷）「いやもふごろとも申し分はござりませぬ。」
（雨）「これがやはり雨降って地固まるでござります。」
（風の神）「ほんの風間（かざまん）が悪かったのでござります。」
（風）「いままてはあったら口に風をひかした。[89]」

＊大荒れの天気に驚いた天道様は、雨風を叱りつつ仲直りを取り持って、世界は平穏になる。

絵柄：仲直りの盃を両手に一杯ずつ持った天道様を中央にして、左側には風の神と、その後ろに「風」と頭に標を頂いた風連中。風の神の前には「風」と書かれた団扇が置かれる。天道様の右側には雷とその廻りに「雨」と頭に標を頂いた雨連中。雷の前には桴二つが置かれる。

［二十三図］（二十ウ）

つゞき天へも此事を断わり給ひ、今までの木像にて門の修復も結構に出来上がり、開帳の賑はひ、天気続けば、参詣押しも分けられず、金儲けの掴み取り、商人の繁昌めでたかりける次第なり。

御かほのくすり　仙女香（長い広告文）
富貴自在　運利香（長い広告文）
十返舎一九作

＊今までの木像を使って門の修復もでき、開帳の参拝客で繁昌する。

23図

絵柄：金龍山の看板のもと、参拝客が押し合いへし合いの状況が描かれる。大きい唐傘に多くの札を垂らしているのは飴売りだろうか。境内の図様によく描き入れられる。

本合巻の場合、国会本、平沢本とも、本文の後、上巻の後と同様の「文政九年」目録が載る。

〈註〉

（1）うけあいの西瓜（すいか）：（西瓜を売る商人が、中身のうまいことをうけあうのを常とするところから）保証する、まちがいない、だいじょうぶだ、などの意をしゃれて言う語。また、うまいという言葉を引き出す表現。＊滑稽本・世中貧福論〔一八一二〜二二〕下・二「よ

い時分に中の隔てをとって、打こみにしてそれから魂胆をすれば、請合（ウケアイ）の西瓜（スイクヮ）、美味い都合としめし合せて引わかれ」：日本国語大辞典

（2）浅草神社：浅草観音堂（康注：浅草寺の始まり）は、推古天皇の御代に隅田川に流れ寄った観音像を、漁夫の檜前（ひのくま）竹成・同浜成が拾い上げて祀ったと伝えられており、この漁夫とそれを教え諭した土師真中知（はじのまなかち）命との三人を祀ったのが三社権現であるという。近世初期の『浅草寺縁起』には、これを「三所護法」、同一本には「三所権現」としており、以後『江戸名所記』には「三所の護法神」、『江戸雀』には「三所の護法」とし、『紫の一本』あたりから「三社権現」（康注：観音堂の傍らに位置）と記している。：国史大辞典

（3）因果地蔵：江戸、浅草寺伝法院（本坊）の北側にあった地蔵。天明（一七八一～八九）頃盛んに信仰された。その名の由来は、「私は因果な者です」と言って祈ると、願いがかなえられるとしたためとも、立ち小便を見張るような場所にある因果な地蔵の意ともする（随筆・柳亭記 一八二六頃か）。＊洒落本・中洲雀〔一七七七〕「浅草の因果地蔵様へ七日参をして願をかけ」：日本国語大辞典

（4）くめのへいない：江戸初期の伝説的人物。九州の人。本名、兵藤長守。江戸に出て千人斬りの願を起こしたが、悔い改めて、自らの像を刻んで浅草寺（せんそうじ）仁王門外に置き、通行人に踏みつけさせたという。のち、「踏みつけ」が「文付け」と解され、縁結びの俗信の対象とされるようになった。：デジタル大辞泉。①江戸初期の伝説的武士。姓は兵藤、名は長守。九州の人。通称平内兵衛。浪人となって江戸赤坂に道場を開き、夜々、辻斬りを行なったが、のち、以前の行ないを改めて、鈴木正三に仁王座禅を学び、浅草金剛寺で専念する。天和三年（一六八三）没という。②東京浅草の浅草寺（せんそうじ）に安置された石作りの坐像。平内が罪業消滅を願って人々に踏み付けてもらうために刻んだ自像という。のち、「踏付け」が「文付け」に解されて縁結びの神とされ、願掛けに文を納める風習が生じた。：日本国語大辞典。

（5）くりん：仏語。五重塔などの頂上の、露盤の上の請花（うけばな）と水煙（すいえん）との間に位置する九つの輪。空輪、相輪ともいう。原型は古代インドに求められる。：日本国語大辞典

（6）煮端：煎じたての味も香りもよい頃合のお茶。でばな。いればな。にばちゃ。日本国語大辞典

（7）船橋屋：江戸深川佐賀町（東京都江東区佐賀）にあった菓子商、船橋屋織江の店。練羊羹（ねりようかん）が名物。＊洒落本・花街鑑〔一八二二〕上・二「『只今ではまづ舟（フナ）ばしやでござります』〈略〉『ずいぶん上品に喰るのふ』」：日本国語大辞典

（8）みあきる：たびたび見ていやになる。あきるほど見る。見飽く。：日本国語大辞典

（9）とびに油揚（あぶらあげ）を攫（さら）われる：思いがけず横あいからたいせつなものを奪われる。当然自分のものになると思っていた物を、不意に横取りされて呆然とするさまにいう。鳶に掛けらる。：日本国語大辞典

（10）胡麻揚：野菜、魚肉、豆腐などを胡麻油であげた食品。：日本国語大辞典

(11) ごふうじゅうう（五風十雨）：（五日ごとに一度風が吹き、一〇日ごとに一度雨が降る意）天候が順当なこと。転じて、世の中が太平なこと。＊洒落本・両国栞〔一七七一〕序「あわ雪は豊年の瑞を著し、五風十雨（ゴフウジウウ）を潤して、五十嵐（いがらし）さかへ」：日本国語大辞典

(12) しぐれ（時雨）：秋の末から冬の初めにかけて、ぱらぱらと通り雨のように降る雨。：デジタル大辞泉

しぐれに（時雨煮）ハマグリなどのむき身に、ショウガを加えて佃煮（つくだに）風に煮上げた料理。：デジタル大辞泉

(13) むらさめ（群雨・叢雨・村雨）：にわかに群がって降る雨。激しくなったり弱くなったりして降る雨。にわか雨の類。：日本国語大辞典

まつかぜ・むらさめ（松風・村雨）：在原行平（ありわらの―ゆきひら）が須磨（すま）でよんだという歌をもとに生まれた説話上の姉妹。かつて行平に愛された海女の姉妹が亡霊となって旅の僧の前にあらわれ、行平形見の狩衣（かりぎぬ）を身につけて舞う。能「松風」、御伽（おとぎ）草子「松風村雨」、人形浄瑠璃（じょうるり）「松風村雨束帯鑑（そくたいかがみ）」などは松風物といわれる。：日本人名大辞典

(14) 無尽講：互に金銭を融通しあう目的で組織された講。世話人の募集に応じて、講の成員となった者が、一定の掛金を持ち寄って定期的に集会を催し、抽籤（ちゅうせん）や入札などの方法で、順番に各回の掛金の給付を受ける庶民金融の組織。頼母子（たのもし）。頼母子講。頼母子無尽。無尽金。無尽。：日本国語大辞典

一の富：富くじで第一番の当たりくじ。

(15) せんじょこう（仙女香）：江戸、京橋南伝馬町三丁目稲荷新道（東京都中央区京橋三丁目）の坂本屋で売り出した白粉（おしろい）。歌舞伎役者三世瀬川菊之丞の俳名「仙女」にちなんで名づけられたもの。美艶仙女香。：日本国語大辞典

(16) しおらしい：上品で優美な様子である。ひかえめで従順な様子である。かわいらしい。可憐（かれん）である。けなげな様子である。感心である。殊勝である。：日本国語大辞典

(17) こうこうもの（孝行者）：ある物事に熱中し、特にそれを愛好する者。＊滑稽本・東海道中膝栗毛―発端〔一八一四〕「安部川町の色酒にはまり、其上旅役者華水多羅四郎が抱の鼻之助といへるに打込、この道に孝行（カウカウ）ものとて、黄金の釜を掘いだせし心地して悦び」：日本国語大辞典

(18) おつ（乙）：普通と違って、一種のしゃれた情趣があるさま。＊洒落本・辰巳之園〔一七七〇〕「『このごろ名代の、六部女郎さ』『おつな子だね』」＊咄本・春袋〔一七七七〕水馬「なんと、あの水馬といふものはおつなものだ」：日本国語大辞典

(19) きんきん（金金）：（形動タリ）。（明和～安永（一七六四～八一）頃の江戸の流行語）今風でしゃれていること。また、身なりを立派に飾り、得意になるさま。ぴかぴかと輝いていること。きらびやかで豪華なさま。：日本国語大辞典

(20) 疾うから：早くから。ずっと以前から。

(21) ぴしゃ―ぴしゃ：軽く連打する音、また、そのさまを表わす語。＊滑稽本・七偏人〔一八五七～六三〕三・下「榛を振上て地平（ぢびた）をぴしゃぴしゃ叩きながら」：日本国語大辞典

(22) どろどろ：雷や大砲などが鳴り響く音、車馬などが音を響かせて

往来するさまなどを表わす語。また、地鳴りなど不気味な音などを表わす語。：日本国語大辞典

(23) はりとう：手品師や軽業師などがその口上の末尾に言う掛け声。＊歌舞伎・三十石始〔一七五九〕序幕「是れより山がらの餌おとし、鶯の谷渡り、あなたこなたへ通うて参る、ハリトウハリトウ」＊浄瑠璃・新版歌祭文（お染久松）〔一七八〇〕野崎村「すりかへた品玉の太夫、早咲き久松でございます。ハリトウハリトウ」：日本国語大辞典

(24) 能の曲目である橋弁慶の文句を踏まえる。

橋弁慶：謡曲。四番目物。各流。作者不詳。「義経記」による。武蔵坊弁慶は従者から京の五条橋で人を斬りまわる少年がいると聞いて討ちとる決意をする。やがてその少年、牛若が橋に姿を現わして弁慶と大激闘になり、ついに弁慶が負けて二人は主従の契りを結ぶ。：日本国語大辞典

(25) 流行語の利用。

とうはちごもんぐすり（藤八五文薬）：①長崎の綿屋藤八を本家とする一粒五文の薬。万病に効くといわれた。文化・文政（一八〇四～三〇）頃、江戸で薬箱を背負い、一人が「藤八」と呼ぶと、他の一人が「五文」と応じ、両人がともに「奇妙」と合唱して売り歩いた。文政八年（一八二五）中村座で、五代目松本幸四郎がその行商人に扮して評判となった。藤八。藤八薬。藤八五文。：日本国語大辞典

②文化・文政（一八〇四～一八三〇）のころ、江戸ではやった行商の薬売り。また、その薬。二人一組で歩き、一人が「藤八」と呼ぶと、他の一人が「五文」と応じて、ともに「奇妙」と合唱した。長崎の綿屋藤八が始めた薬で、一粒五文であったことからの名。藤八薬。藤八五文。：デジタル大辞泉

とうはちけん（藤八拳）：《藤八五文薬の売り声から、あるいは幇間（ほうかん）藤八からという》拳の一。二人が相対し、両手を開いて耳のあたりに上げるのを狐、ひざの上に置くのを庄屋、左手を前に突き出すのを鉄砲（または狩人）と定め、狐は庄屋に、庄屋は鉄砲に、鉄砲は狐にそれぞれ勝つ。狐拳（きつねけん）。庄屋拳。：デジタル大辞泉

(26) いけふさふさしい：（「いけ」は接頭語）いやにふてぶてしい。非常にあつかましい。＊滑稽本・浮世風呂〔一八〇九～一三〕二・下「能（いい）かと思って大勢の人さまも聞てござる中でいけふさふさしい」：日本国語大辞典

(27) 雨が降ろうと槍が降ろうと：どんなことがあっても。いったん決心した以上は、たとえどんな障害があろうと、必ずやりとげようとの固い決意をいう。：日本国語大辞典

(28) えてる（得手る）：…が得意である。巧みである。熟練している。：日本国語大辞典

(29) ほうはつ：よもぎのように伸びて乱れた髪。

(30) いんげん（？）：高慢なものの言いよう。えらぶって、誇大に言う口のきき方。また、そのことば。（形動）目上の者を無視したふるまいをすること。無礼なさま。僭越（せんえつ）。：日本国語大辞典

(31) 腹が居る：怒りがおさまる。鬱憤が晴れる。「腹が立つ」に対していう語。：日本国語大辞典

(32) いつける（言付ける）：「いいつける（言付）」の変化した語。：日本国語大辞典

(33) ろくそっぽう【陸そっぽう／碌そっぽう】：《近世江戸語》［形動］

あとに打消しの語を伴って、満足な状態でないさまを表す。ろくな。「どうで―な事はねえはずだ」〈滑・浮世風呂・二〉［副］「ろくすっぽ」に同じ。「―およぎも知らねえで」〈魯文・西洋道中膝栗毛〉［補説］「碌」は当て字。：デジタル大辞泉

(34) はっせん（八専）：壬子（みずのえね）の日から癸亥（みずのとい）の日までの一二日間のうち丑（うし）・辰（たつ）・午（うま）・戌（いぬ）の四日を間日（まび）として除いた残りの八日をいう。この八日は、壬子（水水）・甲寅（木木）・乙卯（木木）・丁巳（火火）・己未（土土）・庚申（金金）・辛酉（金金）・癸亥（水水）で、上の十干と下の十二支の五行が合う。一年に六回あり、この期間は雨が多いといわれる。また、嫁取り、造作、売買などを忌む。八専日。専日。：日本国語大辞典

(35) こぬかあめ：細かな雨。霧のように細かい雨。細雨。ぬか雨。霧雨（きりさめ）。：日本国語大辞典

(36) 雪中庵：俳人、服部嵐雪の別号。桜井吏登・大島蓼太などによって継承され、その一門を雪門と呼んだ。：日本国語大辞典

せつもん（雪門）服部嵐雪（はっとりらんせつ）系統の俳諧の流派。榎本其角（えのもときかく）の江戸座に対し、俳風は平明・温和。桜井吏登（さくらいりとう）・大島蓼太（おおしまりょうた）らの活躍で天明期（一七八一～一七八九）には江戸俳壇で最大の勢力をもった。：デジタル大辞泉

中山『十返舎一九研究』六七頁：三丁ウラには（康：上掲の作者の台詞）の雪中庵蓼太の句を引いている。雪中庵は初世が服部嵐雪、二世が桜井吏登で大島蓼太は三世である。彼は天明七年九月に没しているので、一九が直接交渉を持ったかという点については、すぐに肯定するのは困難である。すなわち、天明三年から寛政二年まで一九は上方に滞在しており、戯作者として名を成したのは江戸帰着後でこれは蓼太没後である。しかし、蓼太は生前数回にわたり一九の生地である駿府へ旅をして同地の同好の士と交際を結んでいる。この頃の一九は勿論まだ若かったが、もし俳諧に興味を抱いてグループの一員として名を連ねていたとしたら、蓼太との接点があった可能性はある。因みに、一九の描いた俳画に「雪中庵蓼太書」と書名のある句が書かれてある資料が現存するので、この二人の関係についてはこの資料の検討も含めて今後考えねばならぬ課題である。

(37) かよいちょう（通帳）：掛買い分割支払いなどのとき、その品名、金額、月日などを記しておき、後日金銭を授受するときのひかえとする帳面。かよい。通い日記。：日本国語大辞典

拙稿「近世大衆文芸の趣向考究――合巻『忠臣狸七役』に現れた「七役」と「狸」を端緒に」（『日本語文学』43号、二〇〇九年一二月、韓国日本語文学会）の「3・3　大目玉小僧の狸」で詳論している「一つ目小僧、雨降り小僧、大頭小僧、豆腐小僧、大目玉の小僧、目の玉の光る小僧、酒買い小僧、豆狸」と呼ばれる妖怪を指すのであろう。一九作合巻『忠臣狸七役』（文政十一年刊）五オに、笠を被った狸が雨の中「例の大目玉の小僧が、酒を買ひに行くなりに」化ける場面があり、貧乏徳利・通い帳を手にして描かれるのである。

(38) 『仮名手本忠臣蔵』の冒頭「嘉肴（かかう）有（リ）といへども食（しよく）せざれば其（その）味（あぢはひ）を知（〈し〉）らずとは。國（くに）治（おさまつ）てよき武士（ぶし）の忠（ちう）も武勇（ぶゆう）も隠（〈かく〉）るゝに。だと〳〵ば星（ほし）の書（ひる）見〳〵ず夜（ル）

は乱（みだ）れて顯（あら）はるゝ。例（ためし）を爰（こゝ）に仮名書（かながき）の太平（たいへい）の代（よ）の。政（まつりごと）。

(39) にょごのしま（女護島）＝「にょうごのしま」とも。女だけが住むという想像上の島。中国の「三才図会」に「女人国」に関する記述があり、その影響で御伽草子の「御曹子島渡（おんぞうししまわたり）」に主人公源義経が回った島の一つに「女護島」があり、この島の女は、南風にあたると孕み、生まれる子もまた女子であったと記されている。近世にはいってこの島は伊豆の八丈島をさすという噂（うわさ）の立ったことが「八丈実記」「甲子夜話」に見える。にょごがしま。にょうごこく。にょうごのしま。：日本国語大辞典

(40) てんつく：太鼓の音などを表わす語。＊咄本・戯言養気集〔一六一五～二四頃〕上「さはらばひやせさはらばひやせ、てんつくてんつくと、いねながら、あしびゃうしふんで」＊歌謡・松の葉〔一七〇三〕三・かづま「つくつくてんつくつくどんがらが、太鼓の音もよし、やっとしよ」＊浄瑠璃・丹波与作待夜の小室節〔一七〇七頃〕上「浅草上野の花盛、又堺町木挽（こびき）町の、てんつくてんつく木偶（でこの）坊」：日本国語大辞典

『膝栗毛』八編下巻生玉の神社境内で、弥次喜多が粟餅（あはもち）の／典春（きよくつき）を見物するところがある。「此ところを／元祖（ぐはんそ）とす　むかふはちまきに、手ぎね、しやにかまへたるおとこ「サア〳〵、ひやうばんで〳〵。元祖／名代（なだい）あはもちのきよくづきは、生玉やが家の／看板（かんばん）、ソレつくぞ、ヤレつくぞ、アリヤ、コリヤ、つく〳〵〳〵、何をつく、粟（あは）つく麥（むぎ）つく米（こめ）をつく。旦那（だな）はんがたには供（とも）がつく。わかい後家御（ごけご）にやむしがつく。隠居（いんきよ）さんは、ちよちんで餅（もち）をつく。おやまはお客のゑりにつく。げい子にや又してもあしがつく。コリヤ居去（いざり）の金たまへ砂（すな）がつく。ヨイ〳〵、サッサ〳〵、ひやうばん〳〵　弥次「おいらは年中うそをつくがきいてあきれらア」

(41) 寄り：腫れものの毒が一ところに固まること。また、その固まり。：日本国語大辞典。　発疹や腫物が一ヶ所に固結すること。また、その固まり。「あせもの寄り」：広辞苑。　できものなどが一か所に固まること。また、その固まり。「あせもの―」：デジタル大辞泉

(42) かたで風を切る：肩をそばだてて大威張りで歩く。威風を示したり、権勢を誇ったりするさまにいう。：日本国語大辞典

(43) 振り出し：振り出し薬の略。布の袋に入れたまま湯に浸し、振り動かしてその薬気を出す薬剤。湯剤。：広辞苑

(44) むかばら（向腹）：「むかっぱら（向腹）」に同じ。＊滑稽本・古朽木〔一七八〇〕一「生得正直者にて、むか腹（バラ）をたてども邪な心なく」：日本国語大辞典

(45) たきつける（焚付）：①火をつけて燃やし出す。特に、かまどの火をつける場合にいう。②相手の感情を刺激して、ある行動にかりたてる。けしかける。：日本国語大辞典

(46) たいこを叩く：「たいこ（太鼓）を打つ」に同じ。＊洒落本・金枕遊女相談〔一七七二～八一頃〕「かみさんがたいこをたたき、きゃくのごろつかぬやうに、われもぬれごとに気をきかせ」＊随筆・北里見聞録〔一八一七〕三「大鼓持の説。〈略〉当世物のとりなしをいふ事を、太鼓を叩くといふも、此説よりおこりしなるべし」

たいこを打つ：他人のいうことに調子を合わせる。相手の取り持ちをしてきげんをとる。迎合する。また、座興をとりもつ。太鼓を叩く。太鼓を持つ：日本国語大辞典

(47) たちぐも（立雲）：入道雲の異称。＊雑俳・柳多留一二三〔一七八九〕「立（たチ）くものにわかに見へる向ふじま」：日本国語大辞典

(48) むしやしない（虫養）：（腹中の虫に食物を与えるの意）空腹を一時的にしのぐこと。また、その軽食。虫おさえ。転じて、性欲その他の欲望を一時的に満たすこともいう。

＊玉塵抄〔一五六三〕四五「尊宿長老などに酒をかんをして果子肴をすすむるを叢林のことばに虫やしないの薬と云」＊歌舞伎・宿無団七時雨傘〔一七六八〕一「十八貫のかたに、是を剥いでこますが当分の虫（ムシ）やしなひ」：日本国語大辞典

《腹の虫に食物を与える意》空腹を一時的にしのぐこと。また、その食物。他の欲望についてもいう。虫押さえ。：デジタル大辞泉

(49) 能の「白楽天」で、詩聖白楽天（ワキ）は、賤しい姿の釣りの老人が、妙なる歌を詠んだので仰天するのだが、それに対して住吉明神である漁翁（シテ）は、「されども歌を詠む事は。人間のみに限るべからす。生きとし生ける物毎に。歌をよまぬは無きものを。ワキ「そもや生きとし生ける物とは。さては鳥類畜類までも。シテ「和歌を詠ずるその例。ワキ「和国に於て。シテ「証歌多し。花に鳴く鶯。水に住める蛙まで。唐土は知らず日本には。歌をよみ候ふぞ翁も。大和歌をばかたの如くよむなり。」

(50) おでいり（御出入）：「でいり」を、その家、主人を敬っていう語。特に、主人の恩情によって、その家にではいりができること。また、その人。＊浮世草子・世間娘容気〔一七一七〕三「お出入の町人をめされて御酒宴をはじめらるるに」：日本国語大辞典

(51) 雨乞小町：小野小町が勅命を受けて雨乞いの和歌「千早振る神も見まさば立ちさわぎ雨のと川（天の戸川）の樋口（ひぐち）あけたべ」（「ことわりや日の本なれば照りもせめ　さりとてはまた天が下かは」とも）を詠み、その徳で雨が降ったという伝説。これに基づいた長唄、浄瑠璃、歌舞伎などの作品がある。

(52) かえるは口から［＝口故］呑まるる：蛙は鳴くために、居場所がわかって、蛇にのまれる意から、余計なことを言って、わざわいを招くことのたとえ。＊洒落本・素見数子〔一八〇二〕二「なま中、言（いは）ずともよいことを放言（しゃべり）過し、終に虻もとらず蜂もとらず、ほんの蛙（カイル）はくちからと、さりとは気の毒せんばんなり」：日本国語大辞典

(53) こしおれうた（腰折歌）：和歌で、三句と四句との接続が悪いもの。転じて、へたな歌。腰折。＊浄瑠璃・吉野都女楠〔一七一〇頃か〕五「公家ならば公家の様に柿の本のながれをくみ、こしおれ歌でも読まずして、身にもじゅくせぬ武家まじはり終にやひばにさし通され」：日本国語大辞典

(54) 三介待ったり：江戸後期、寛政（一七八九～一八〇一）頃の流行語。下男の三助みたいに、あわてないで、ちょっと待てとしゃれていった語。＊黄表紙・盧生夢魂其前日〔一七九一〕「獅子の洞入、洞返り、三介待ったり三介待ったり」＊洒落本・面美知之〔一七八九～一八〇二頃〕一「そんなに三助まったりをみるやうにからだ斗りふってもいふことはてねへ。あんまりきをもむなへエ」：日本国語大辞典

(55) 長雨が続くときや、ぜひとも翌日に晴天を望むときに軒先などにつるす紙の人形。四角な紙の真ん中あたりに芯（しん）を入れ、丸く縛って頭にしたごく簡単なものもある。願いがかなって晴天になった場合は、墨で眼睛（ひとみ）をかき、または頭から酒を注いで川へ流してやったりする。もともと中国から渡来した風習といわれているが、日本では江戸時代中ごろから行われていたらしい。：日本大百科全書

(56) 着物の肩に丸をしてひらがなで「てる〳〵ぼうし」と記していることを意味する。この文句通りに、他の人物名は頭に頂いた丸の中に記すか、丸で囲まず着物に記すかであった。また、念仏を類似した野菜の名を上げることでふざけて唱えたりする。

(57) あがったりや（上屋）：（「あがったり」を商売に見立てて「屋」を付けたもの）「あがったり」に同じ。＊浮世草子・傾城歌三味線〔一七三二〕二・二「わけもない揚屋がすでに上（アガ）ったりやにならふと致した」＊浄瑠璃・三日太平記〔一七六七〕八「彼岸に成ても麦はよふ蒔かず、大根蕪もよふおろさず、百姓は上ったりや」

あがったり：商売や仕事などが全くふるわないで、どうしようもないこと。また、そのさま。また、一般に物事がだめになることやそのさまにもいう。あがったりや。：日本国語大辞典

(58) やみくも（闇雲）：黒雲。＊黄表紙・高漫斉行脚日記〔一七七六〕上「不思議やにわかに空かきくもり、やみくも立かさなりけるままに」

（形動）闇の中で雲をつかむように、漠然としてあてのないこと。また、前後のみさかいのないこと。むりやり行なうこと。また、そのさま。むやみやたら。闇雲無性（やみくもむしょう）。：日本国語大辞典

(59) ぎょうほう（行法）：（古くは「ぎょうぼう」）仏語。仏法を修行すること。また、その方法。特に密教の修法をいう。：日本国語大辞典

(60) なるかみ（鳴神）：歌舞伎狂言。原拠は能の「一角仙人」。歌舞伎では、竜神を封じこめて天下を旱魃で苦しめる鳴神上人を、雲の絶間姫が色香によって堕落させ、竜神を解き放って雨を降らせるので、上人は生きながら雷神（なるかみ）となって怒り狂うという筋。姫が上人を誘惑する場面（特にその中で演じられる恋物語の仕方咄）、最後の鳴神の荒事が見せ場を形成する。江戸で初代市川団十郎が創始したと伝えるが、その初演は確認しがたい。元禄―享保の四十余年間に繰り返し上演されたのち、寛保二年（一七四二）大坂上演の『雷神不動北山桜』に至って完成、現行『鳴神』はこれを復活したもの。天保十一年（一八四〇）以来歌舞伎十八番の一つとされている。『日本古典文学大系』九八、『歌舞伎台帳集成』四などに所収。：国史大辞典

歌舞伎（かぶき）劇。時代物。一幕。津打半十郎、安田蛙文（あぶん）、中田万助合作。一七四二年（寛保二）一月、大坂・佐渡島（さどしま）座で二世市川団十郎の鳴神上人（しょうにん）、初世尾上（おのえ）菊五郎の雲の絶間（たえま）姫らによって初演された『雷神不動北山桜（なるかみふどうきたやまざくら）』の四幕目が独立したもので、「歌舞伎十八番」の一つ。能『一角（いっかく）仙人』にヒントを得て初世団十郎が一六八八年（元禄一）、自作の『門松四天王（かどまつしてんのう）』で演じ好評を得た鳴神の話を、王朝時代の宮廷騒動に結び付けて脚色。朝廷に不満をもつ鳴神上人は、竜神を滝壺（たきつぼ）に法力で封じ込めたため、天下は日照りに悩まされるが、勅命を受けた美女絶間姫が色仕掛けで上人を誘惑、ついに鳴神は（康：酒に酔いつぶれ）破戒して行法も破れ、豪雨になる。：日本大百科全書

(61) 音楽論議をきっかけとする富士太郎と浅間の二楽人の確執に始まる仇討ち物『三国一夜物語』(文化三年刊の読本、曲亭馬琴著)などがある。琴と笛の音を契機にする忍び会いや、相伝の太鼓を叩いて意を知らせるなど、楽器づくしの筋立てである。

(62) ごしちの雨に四(よ)つ旱(ひでり):(地震のあった時刻でその後の天候を推知するという江戸時代の「九は病五七が雨に四つ旱六つ八つならば風と知るべし」の歌から)五つの刻(八時頃)と七つの刻(四時頃)に地震が起こると雨が降り、四つの刻(一〇時頃)では日照りになるということ。＊洒落本・無量談〔一七七一〕「五七の雨に四つひでり、五百八十七曲(まがり)一〆三百四十八文まだも多(やす)いは裏波銭(しもんせん)」＊人情本・蔦蔓恋之花菱〔一八六一〕一「五七(ゴシチ)の雨に四日(ヨツヒ)でりでございませう」:日本国語大辞典

(63) なみだあめ:悲しみの涙が化して降ると思われる雨。涙の雨。＊浄瑠璃・丹波与作待夜の小室節〔一七〇七頃〕夢路のこま「与作思へば照る日も曇る、関の小万が涙雨か」:日本国語大辞典

(64) からかぜ(空風・乾風):湿気や雨雪をともなわないで、激しく吹く風。からっかぜ。《季・冬》:日本国語大辞典

(65) なまずの瓢箪:鯰を押えるひょうたん。＊浄瑠璃・傾城反魂香〔1708頃〕上「勇みかかれる有様は、波や鯰のへうたんへうたん、もって開いて鉢叩き、叩けば滑り打てば滑りぬらり、ぬらりと手にたまらず」なまずを瓢箪で押さえる:鯰をひょうたんで押えようとしても、ぬらぬらしてなかなかつかまらないように、物事が要領を得なくて、とりとめがないたとえ。瓢箪鯰(ひょうたんなまず)。＊浄瑠璃・傾城反魂香〔一七〇八頃〕上「あに弟子はうかうかといつまで浮世又平で、藤の花かたげたお山絵や、鯰をさへた瓢箪のぶらぶら生きても甲斐なしと」:日本国語大辞典

(66) ごふうじゅうう(五風十雨):(五日ごとに一度風が吹き、一〇日ごとに一度雨が降る意)天候が順当なこと。転じて、世の中が太平なこと。＊歌舞伎・歌徳恵山吹(太田道灌)〔一八八七〕「よく云ふ五風十雨(ごフウじうウ)とやらで、十日目頃に一降りづつ雨が降ってくれねばいかぬ」:日本国語大辞典

(67) 天明五年刊の京伝作画黄表紙『天地人三階図絵』(『山東京傳全集』第一巻 黄表紙1に所載)五ウに、落雷の響きで頭痛になった地震が描かれるが、擬人化された地震は頭上に「宝珠」らしきものを載せた姿で形容される。

(68) 勧進相撲:勧進(:社寺や仏像の建立、修理などのために広く人々に、それが善根功徳になると勧めて金品の寄付を募ること)のために興行する相撲。後には、それを名目として木戸銭を取って行なう興行をもいう。寄相撲(よりずもう)。かんじんすまい。勧進。《季・秋》日本国語大辞典

(69) せいてんとおか(晴天十日):(晴れた日一〇日間の意)大相撲興行の日数。安永七年(一七七八)に江戸の深川八幡で一〇日間興行されたのが最初で、恒例となったのは、天明元年(一七八一)両国回向院からのことで、それ以前は晴天八日であった。＊随筆・海録〔一八二〇～三七〕一八「街談録抄〈略〉安永七三廿八 角力興行〈深川八幡〉晴天十日〈今迄は八日也、此時より十日と定る〉」:日本国語大辞典

(70) ふれだいこ(触太鼓):あることを広く知らせるために打つ太鼓。

芝居・相撲などで行なわれたが、特に、相撲で、初日の前日に取組などを太鼓をたたいて市内に触れ回ること。また、その太鼓。＊東京風俗志〔一八九九～一九〇二〕〈平出鏗二郎〉下・一〇・相撲「興行の前日ごとに市中に触〳〵れ太鼓をまはして、明日の興行及び取組の番組を報ず」：日本国語大辞典

太鼓まわし：七月一八日深夜、葛川坊村町の明王院で行われる。明王院を開いた相応が三の滝の滝壺に不動明王を感じて飛び込んだという故事にちなみ、勢いよく回して止められた大太鼓の向こうに行者が合掌しながら飛びこえるという勇壮な行事。：大津市歴史博物館 http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/jiten/data/009.html

天明四年刊京伝作画の黄表紙『天慶和句文』はお月様放蕩の話だが、「雷の妻を稲妻という。今日、相撲の太鼓が廻りしゆえ、明日の雨の支度をする」という文章がある。雨乞いの行列と相撲の触れ太鼓の行列を見立てたのだろうか。

(71) これい（古例）：昔の慣習。古くから行なわれてきた慣習。また、記録などに残された先例。：日本国語大辞典

(72) きう（祈雨）の相撲（すまい）：雨乞いのために神前に奉納される相撲。＊大乗院寺社雑事記―文明一七年〔一四八五〕七月二四日「定祈雨相撲次第事　第一番〈南市、幸井〉一番」：日本国語大辞典

(73) 「とび鳴けば風吹く」：鳶が鳴くときは風が起こる。＊諺草〔一六九九〕一一「鳶鳴は風吹　曲礼曰、前有塵埃則載鳴鳶。〈注〉鳶鳴則将風：日本国語大辞典

(74) からす（烏）：烏は神社の森などに群をなして住みついているために、烏を神使とする信仰が、伊勢・熊野・祇園・三嶋・厳島・住吉・諏訪などの神社にあり、特に熊野の牛王宝印には、三足の烏が描かれている。新潟の弥彦神社では、毎年十二月二十日に、一羽の烏が、神使として佐渡の度津（わたつ）神社へ渡るといわれる。関東や東北では、一月の初山入りの日に、烏に米や餅を与える風習があり、近畿や中国では、旧三月のハルゴトの日に、烏の食物を、木の枝や屋根に上げる風習がある。いずれも烏を山の神の使とする信仰である。→八咫烏（やたがらす）：国史大辞典

からす　浴（よく）すれば風雨（ふうう）の示し：烏が水浴びをすると、天気が荒れ模様となり、雨が降る前兆である。＊譬喩尽〔一七八六〕二「鴉（カラス）浴（ヨク）すれば風雨（フウウ）の示（シメ）し」：日本国語大辞典

(75) おこうびより（御講日和）：報恩講の頃に、晴天の日が続くこと。御講和（おこうなぎ）。《季・冬》＊雑俳・雲鼓評万句合―寛延二〔一七四九〕「箱入の出ありく御講日和哉」＊東都歳事記〔一八三八〕一一月二二日「一向宗寺院報恩講、廿八日まで修行。〈略〉世俗おかうといひ、又おしも月といふ。〈略〉昨今快晴なるを世俗おかう日和（ヒヨリ）といふ」：日本国語大辞典

(76) もんとしゅう（門徒宗）：浄土真宗の俗称。その信徒を門徒と呼ぶところからいう。門徒家とも。＊米沢本沙石集〔一二八三〕四・一「唯識・唯境の諍ひ高くして、門徒宗（モントシウ）を別ち互に是非する事を」＊雑俳・削かけ〔一七一三〕「出したがる・事がな金を一向宗（モントしゅう）」＊随筆・胆大小心録〔一八〇八〕七一「今にては門徒宗のさかんなる事、是に皆おさるるばかり也」：日本国語大辞典

(77) かたぎぬ【肩衣】：門徒の信者が経を読む際に着流しのまま肩に羽

織るのに用いる衣。＊浮世草子・好色五人女〔一六八六〕二・三「津村の御堂まいりとてかたぎぬは持（もた）せ出（いで）しが」：日本国語大辞典

(78) じゅうや（十夜）：浄土宗の寺で、陰暦十月五日の夜半から十五日朝まで十昼夜の間、絶えず念仏を唱える行事。現在は十月十二日夜から十五日早朝までの三昼夜に短縮されている。京都の真如堂のものが有名。お十夜。十夜念仏。十夜法要。《季　冬》「門前に知る人もある―かな／虚子」：デジタル大辞泉

(79) あめあいだ：「なむあみだぶつ」を「雨間」といった洒落か。地口。

(80) まないたなおし（俎板直）：真宗東西両本願寺の報恩講の最後の日に、精進落ちの意味で、鯉を俎板にのせて料理して、仏に供え、また参詣人に振舞う式。まないた。＊俳諧・おくれ双六〔一六八一〕冬「末那板直し龍女や恨む魚成仏〈〉」＊滑稽本・東海道中膝栗毛〔一八〇二～〇九〕五・下「おまな板なをしに鯉のひれふるはこれ佐用姫の石井でんかも」：日本国語大辞典

(81) いだてん（韋駄天）：仏語。南方の増長天に属する八将軍の一。四天王の八将軍を合わせた三十二将軍全体の長。もとバラモン教の神で、シバ神またはアグニ神の子という。仏教に取り入れられ、僧あるいは寺院の守護神となった。形像は、身に甲冑（かっちゅう）を着け、合掌した両腕に宝剣を持つ。釈迦が涅槃（ねはん）の後、捷疾鬼（しょうしつき）が仏舎利から歯を盗み去ったとき、この神が追いかけて取り戻したという俗説がある。非常な速さで駆け、魔鬼を排除するとされるところから、足の速いことや人をもいう。：日本国語大辞典。

当時神社仏閣の境内で良く行われていた見世物の一種である曲乗りを、ここは神である韋駄天がやっているという設定か。

(82) ひゃくまんべんねんぶつ（百万遍念仏）：彌陀の名号を七日間ないし一〇日間に百万回唱えること。古く中国の僧道綽（どうしゃく）に始まると伝えられる。日本の浄土宗では元弘元年（一三三一）後醍醐天皇の勅により知恩寺八世善阿空円が行なったのが最初とされる。百万遍。：日本国語大辞典

(83) 「馬の耳に風」：＝（「馬耳東風」による。馬の耳に風が当たっても馬はいっこう気にとめないところから）人の話が耳にはいっても全然心を動かさないことのたとえ。馬の耳に念仏。牛の角に蜂。馬の耳。：日本国語大辞典

(84) 風邪を引いた様子の形容か。

(85) どんづら（鈍面）：顔を卑しめていう語。鈍いこと。まぬけなこと。また、その人。ばか。：日本国語大辞典

(86) 舐らす＝舐めさせる。ねぶる（舐る）：物事や人などを軽く見る。見くびる。＊洒落本・正夢後悔玉〔一七六一〕中「去りとはあまい親達といつねぶって見たやらあのけしけしめらと」：日本国語大辞典。

地口を利用している。

(87) はちじゅうはちや（八十八夜）：立春から八八日目の日。陽暦の五月一、二日ごろに当たる。この頃が霜の降りる最後となるので、忘れ霜、別れ霜、霜の果（はて）などといい、これ以後は降霜の心配がないので、農家では種蒔きの季節とする。米という文字を分けて書くと八十八になるところに、この日が由来するといわれ、農耕上大切な日とされている。《季・春》＊惜命〔一九五〇〕〈石田波郷〉「きらきらと八十八夜の雨墓に」：日本国語大辞典

(88) にひゃくとおか（二百十日）：立春から数えて二一〇日目に当たる日。九月一日頃で、稲の開花と台風の襲来とがぶつかる時期なので、農民は厄日として警戒する。《季・秋》＊全流舟軍之巻〔一六四六〕「野分と云ふ風の事、是は二百十日前後七日の内に吹くもの也」＊浮世草子・好色盛衰記〔一六八八〕一・目録「二百十日の恋風を待」：日本国語大辞典

(89) あったらくちに風ひかす：せっかく言い出したのに効果がない。無駄口を叩く。：広辞苑